



2010年4月28日放送

漢方医人列伝 「津田玄仙」

平馬医院 院長 平馬 直樹

本日紹介する津田玄仙は、18世紀後半から19世紀初頭にかけて活躍した医家です。古方派の中心人物、吉益東洞の直弟子たちの世代に相当します。玄仙は、江戸前期の主流医学であった後世派医学を受け継ぎながら、古方派が興隆した時代の影響も受け、和田東郭、原 南陽らとも交友し、幅広い医学知識を身に付けた優れた臨床家でした。また、医学教育家としてもすぐれ、江戸期の日本の医学の一つの特徴とも言える口訣の医学を発展させ、それを教育にも生かしました。

津田玄仙は、1737年に生まれ、1809年に亡くなっています。名は兼詮、積山と号し、玄仙は通称です。後に田村家に養子に入ったため田村玄仙とも呼ばれます。今の福島県の北部、岩代の国桑折村の生まれ、父津田玄琳は、もと白河藩の藩医でした。玄仙は初め、父玄琳医術の手ほどきを受け、長じて水戸に出て、芦田松意に学び、さらに京都で饗庭道庵に学び、後世方の口訣の医学を伝授されています。

後に大坂、江戸で医業を行っていますが、38歳のころに上総の国馬籠、今の千葉県木更津市郊外の医家田村家に養子に入り、亡くなるまでこの地で過ごします。名医として名声が高まり、弟子として入門するものも多く、田村家も栄えました。玄仙は、田村家の第2代の医師田村恕仙の孫娘於能婦を娶って田村家を嗣ましたが、田村家は子孫も栄えて、今

も旧家を維持され、田村家の敷地には門人たちの建てた玄仙の碑が残り、菩提の浪岡寺には墓も残っているとのこと。

玄仙の書き留めた臨床経験や医学論述、講義録などが著作として残り、玄仙の医学と医療の様子がわかります。刊行された書物には『療治茶談』と『勸学治体』があります。『療治茶談』の内容は臨床に関する重要な事柄や漢方処方運用のコツを、思いのままに伝統的な理論を援用しながら自らの経験も踏まえて解説するという記述になっています。多くの治験例も紹介されています。もう一つの刊行医書『勸学治体』は、玄仙が理想とする医学教育を建議する書で、いわば医学校設立趣意書となっています。

このほか、出版されずに写本として遺されている書に『療治経験筆記』、『積山遺言』、また京都の饗庭家の医学を紹介する膨大な記録『饗庭家口訣』、『饗庭秘説』、『百方口訣集』があります。

津田玄仙の医術を紹介するにあたって、まず饗庭流を受け継いだ口訣の医学についてお話しします。

曲直瀬道三が始祖となる後世派医学は、中国明代の医学を日本に移入して形作られたもので、察証弁治の診断治療システムを特徴とします。察証弁治では、病人の症候を伝統理論に照らし合わせて分析し、病気の原因、部位、勢いなどを判断して総合的な病態である証を導き出し、それに基づいて治療方針を決定して、病人の状況に適したオーダーメイドの処方を組み立てます。

後世方医学が継承される中で、このような方法は変化して、古典的な優秀処方を上手に運用することに力を注ぐようになります。曲直瀬の2代目、玄朔の弟子に当たる17世紀前半の長沢道寿や岡本玄治のころから、このような傾向がはっきりとみられます。

『黄帝内経』に基づく中国医学の基礎理論をしっかり身につけなくても、臨床に役立つ処方能力を養うために、診療の勘所や処方運用のコツを、簡潔で平易な口訣すなわち口伝えの秘伝として伝授するという方法が採られるようになりました。

後の古方派では、『傷寒論』『金匱要略』の張仲景方をいかに有効に活用するかに心が砕かれましたが、名のある優良処方の運用に工夫をこらすという現代にも受け継がれている日本漢方の特色は、後世派の後継者の中にすでに萌芽がみられるのです。

伝統理論を初学者にもわかりやすく噛んで含めるように解説して、臨床の勘所や処方運用のコツを伝授するという口訣の医学の最高峰のかたちが、京都の饗庭道庵の医学です。

饗庭道庵は門人も多く、玄仙の父玄琳、師匠の芦田松意、養子先の田村恕仙も饗庭の同門だったとも言われ、影響力があったようですが、自らの医学を秘伝として弟子に伝え、著作も出版することなく表に出なかったため、どのような医家であったのかわかっていません。17世紀の京都に金元医学の劉完素や張子和を重んじる饗庭東庵がいました。道庵がこの系統である可能性もありますが、確証はありません。饗庭道庵の医学が今も遺るのは、先に紹介した『饗庭家口訣』などの写本で遺された玄仙の著作の功績です。

饗庭道庵の講義録を玄仙が記録したのではないかと思える『百方口訣集』の冒頭には補

中益気湯の運用のコツが 8 箇条にわたり詳細に解説されています。後にこの 8 箇条は幕末の浅田宗伯が『勿誤薬室方函』の中に紹介して、広く知られるようになり、現代でも補中益気湯の使用目標として実用価値が高いものとされています。

この 8 箇条は、第 1「手足のだるさ」、第 2「言葉の発声が弱い」、第 3「目に勢いが無い」、第 4「口の中に白い泡を生ずる」、第 5「味覚が鈍い」、第 6「温かいものを好む」、第 7「臍のところで動悸を触知する」、第 8「脈が散大で力がない」というもので、浅田宗伯はこの 8 箇条を簡潔に紹介して、それが現在にも伝わっていますが、『百方口訣集』では一条一条を、なぜその症候が重要で、補中益気湯の使用目標になるのかが詳細に説明され、観察できる臨床症候から説き起こして、薬方使用の根拠となる理論までが理解できるような懇切丁寧な解説となっています。

この饗庭の学統を継承した玄仙も、伝統理論を踏まえた臨床の丁寧な観察と、治療のコツに長けた医家であったことが、『療治茶談』などの著作からみて取れます。

このようなコツを伝授する教育者としての玄仙の優れたアイデアが込められた著作が『勸学治体』です。このころ幕府の医官、多紀家によって医学校躋寿館にて医学教育が始められ、『勸学治体』が刊行された 3 年後の 1791 年には躋寿館が官立の江戸医学館に移管され、幕府の医学校になりました。このような医学校設立の機運の中で『勸学治体』が著されたのでしょう。

江戸医学館の教育が古典を重視したアカデミックなものであったのに対して、玄仙の案は臨床能力を養うためのより実用的な教育内容となっています。医学生の学ぶべき医書として、『傷寒論』のほか、李東垣の『脾胃論』と『内外傷弁惑論』、汪昂の『医方集解』などを挙げ、さらに北山友松子の『増広医方口訣集』、岡本玄治の『玄治薬方口解』などの日本の口訣の医学書を推奨しています。『内経』は王冰の次註と馬玄台、張介賓の解説書で学ぶ、薬物書は『本草綱目』、『本草備要』などを学ぶと指示するなど、実践的な教育を目指しています。具体的な学習法も説かれ、奨学金制度や卒後の勉強法などにも言及した、具体的な医学校設立計画でした。

玄仙の書には、多数の臨床例が収録されています。それらは観察が細かく記述が詳しく、どのような病状だったのか手に取るように理解できるケースレポートになっています。処方運用の解説や処方の鑑別診断も含蓄に富み、学ぶ価値がきわめて高いと思います。

また、腹診など触診も丁寧に行っています。古方派が盛んになった時代でしたが、玄仙の用いる薬方には吉益東洞の影響はみられません。大黃やヒ素などを用いる東洞の攻撃的な治療は受け入れていないのでしょうか。しかし、玄仙の診察法には腹診重視の古方派の影響が感じられます。臨床に役立つものは何でも取り入れるという、優れた臨床家としての玄仙の姿勢がこのことからみても取れます。

口訣の医学の流れは、今も日本の漢方に受け継がれていますが、その最高峰の実用性を備えた玄仙の医術は深く研究し、伝え広める価値が大きいと思われます。